

STUDIO KOMA

Vol.4

The Mailgraph of Monthly Publication

2001.01.31

**PHOTOGRAPHS WITH TEXT
TATSUANG / TATSUYA ATARASHI**

© 2001 Tatsuya Atarashi tatsuang@bigfoot.com

TATSUANG

荒川源流 2

この冬、関東平野は降雪量が多く、奥秩父の荒川源流部でも1メートルの積雪を記録した。そんな中、時には胸まで雪に埋もれながら、源流部の本流、真ノ沢へ向かう。

比較的東京に近い割には、アプローチが長い為か、冬の間ここを訪ねる人はほとんどいない。普段は林道の車止めまで入れるのだが、この日は大滝村・川又の国道脇からスキーで入る。しかし、溪流の取材ではスキーもままならず、結局途中で板をデポし、徒歩で雪の中へ分け入ることに。

辺りは静まりかえり、沢を流れる水と、時折吹く風の音だけが耳を刺激する。

源流へ 荒川源流に通い始めて三度めの冬を迎える。といっても昨シーズンは一度も訪れていないので、実質2年めということか。

埼玉県側から奥秩父の主稜線に立つのは容易ではない。余程の健脚者が軽装で遮二無二に登るならともかく、通常は最低でも山中で一泊しなければたどり着けない。ルートそのものは整備されていて、難しくはないが、このアプローチの長さに二の足を踏む人は多いだろう。富士山でさえ日帰りで往復できるというのにだ。

まして積雪期は尚更のこと。雪の量は年によってまちまちだが、今年のように多い場合ラッセルの重労働を覚悟しなければならない。柔らかい新雪では腰まで潜る雪との格闘になるだろう。誰か先陣のトレースをあてにしても叶わないことの方が多い。正月を過ぎると春先まで山小屋も閉鎖され、好きこのんでこの時期に入山する者は希なのだ。

結局、道は自分で作らなければならない。一人の力が1時間で進める距離はしれている。もっとも北アルプスのように何日も吹雪くことは無いが、侮ってはいけない。必ずしっぺ返しがあるのが自然の掟というものだろう。荒川源流でも小規模な雪崩はあちこちで発生している。

この広い山域とどう関わってゆけばいいのか？まだ明解な答えは出ていない。そのためにも山へ向かう。その中から自ずと見えてくると思っている。



雪と氷が創り出す模様や形は何れ劣らず見応えのあるものだ。沢の至る所にこのような場面が展開されている。

山は写真の宝庫であると共に、人の心を豊かにさせてくれる場所だ。自然界に肉体を曝して接することで、街の中では得られない感覚を養うことができる。五感が鋭敏になり、本来、人が持ち合わせている心身の能力が、山に連続して入ることで研ぎ澄まされてゆく。



真ノ沢は水量が豊富だ。降った雪はその日から解けだし、沢に溢れる。やがてその水は東京湾へと注ぎ、都民の命を支える。海へ流れ出した水はいつの日か海面を上昇し、雨や雪となって、再び山と森を潤わす。見事な自然の循環機能によってわたしたちは育まれている。



沢沿いの崖を縦横無尽に伸びる根幹。いったいどれがどの木なのか区別もつかない。あるいは木と岩の境界すら明瞭ではなくなる。あたかもそれら全てが一つの生命体として機能しているようにも見える。今、わたしたちが暮らす時間軸の中で、内と外、自と他の概念ほど曖昧なものはいないだろう。むしろ、渾然一体とした状態こそが自然界 = 宇宙そのものと云える。

真ノ沢 --- 荒川源流の最深部を流れる。その一滴一滴が荒川本流となり、太平洋を目指す。悠久の時代から途切れることなく繰り返される水の旅。地球生命体の壮大な活動の中で、森も川も存在する。

